

# 8～9月台風の経年変化

藤井 聡 (日本気象予報士会 静岡支部)

## 1. はじめに

台風はある期間に同じような場所に何回も襲う傾向があるようだ。1951年以降8～9月の台風の経路について統計的に分析すると襲来期と非襲来期とが存在し、2つ以上の地域間で相関関係が存在する場合もあるようだ。現在はまだ日本付近に台風が近づきやすい期間であり、大きな台風災害が発生しないように留意しなければならない。

## 2. 過去の台風災害と周期性

1940年代に入ってから日本本土に影響する台風がぐっと増え、枕崎台風、洞爺丸台風、そして、狩野川台風や伊勢湾台風など重大な台風災害が1960年代前半まで相次いだ。洞爺丸台風では、台風の正確な位置がわからなかったため、周囲の穏やかな気象状況で出航を決めた青函連絡船「洞爺丸」が暴風に遭い難破した。T5415は温帯低気圧化の過程にあったようだが、減速と暴風域の拡大はリアルタイムでは知らされていなかった時代の災害である。

しかし、1960年代後半から本土への台風の襲来数がぐっと減り、勢力は強くなっても北上すると弱まったり日本の東海上を北上したりした。しかし、台風全体の勢力が弱まったのではなく、T7315やT7520など台風自体は猛烈に発達するものもあった。多くはフィリピン方面に向かうか日本の南海上、または本州はるか東方海上を北上するものが多かった。

1990年ごろから非常に強い台風が日本本土に影響するようになった。村松(1990)は、最盛期を過ぎ中心気圧930hPa以上に上昇しながらも経路が日本付近に接近・上陸している事実を指摘し、強い台風の襲来期に入ったとしたが、T9019、T9119、T9313、T9918、T0416、T0418など本土上陸か上陸直前まで非常に強い勢力のものが相次いでおり、現在まだこの周期に入っているものと考えられる。

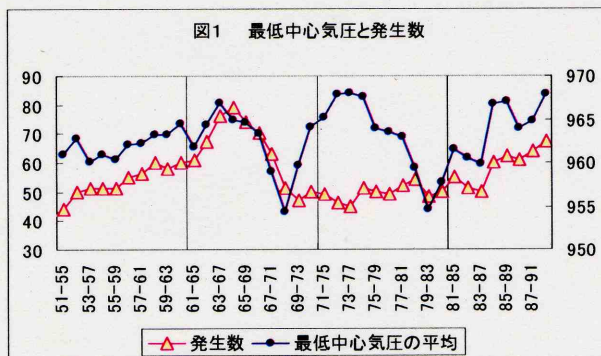
## 3. 調査方法

1951～1992年の台風で、8月1日00時(JST)～9月30日24時の台風について、北緯20°～46°東経120°～150°についてのみ調査対象とした。なお、7月から8月にまたがって存在する場合や、9月から10月にかけて存在した場合は、その経路全体も調査対象とした。

台風の勢力については、上記対象の台風の最低中心気圧と発生数を調べ5年移動平均にして、変化を見るようにした。位置については、上記エリアを緯度経度を用いて2°ごとにメッシュを取り、そのメッシュの中に5年間に台風がいくつ通過したか調べた。そして、通過の増減について比較する場合、台風の発生数にも増減があるので通過率  $PR = \frac{\text{通過個数(5年間)}}{\text{発生数(5年間)}}$  を定義した。

## 4. 台風の勢力と発生数の変化

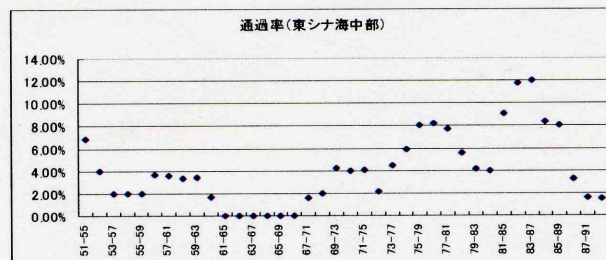
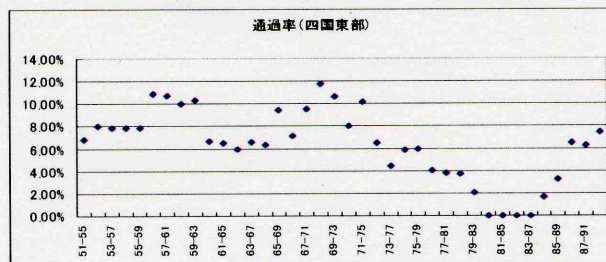
上記方法で調べると、台風の最低中心気圧と発生数(5年移動平均)には図のような関係が見られた。



1950～60年代前半までは発生数が少ないほど中心気圧が低くなるが、60年代後半～70年代の台風は発生数が少なくても中心気圧が高い。80年代はまた発生数が少ないほど中心気圧が低くなるというパターンに戻っている。

## 5. 台風襲来がある時期・地点に集中する傾向

四国は1950～60年代に台風が集中して襲来し「台風銀座」と呼ばれた時代があったが、1980年代は襲来がほとんどなかった。一方、東シナ海・鳥島近海では時期がやや異なるものの70～80年代は台風の通過がかなり増え「台風銀座化」していた。90年代に入ってから九州や四国東部、90年代後半から関東南部で台風の通過が増えている。



さらに、通過率は地域的に相関関係の認められる場合がある。鳥島東方海上と東シナ海は正相関にあり、この地域は東日本・西日本の太平洋側と負相関である。現在はまだ、台風が日本列島に来やすい周期にあると思われる。